『国際日本研究』第 15 号（2023 年）

実践報告

対話と変容としてのプロジェクト型活動
—「つなげる外国人家族と地域社会プロジェクト」からの報告 —
Project-based Activity as a Place of Dialogue and Modification: A Report from the “Connecting Foreign Residents with the Local Community” Project

井出　里咲子（Risako IDE）[1]
狩野　裕子（Yuko KANO）[2]
大塚　葉月（Hazuki OTSUKA）[3]

要旨

本稿は 2021 年度筑波大学社会貢献プロジェクト事業「つなげる外国人家族と地域社会—日本の保育園へようこそ」の活動実践、及び活動を通しての対話とメンバーの変容についての報告である。本プロジェクトでは、保育の場を外国人家族が地域社会に参入する際の入り口と捉え、そこで保育者と外国人保護者が体験するコミュニケーション上の問題を、地域と連携しながら解決するしかけを作ることを目的とする。本稿では 10 か月に渡るプロジェクトの活動を、プロジェクトメンバーが地域社会と「つながる」フェーズ、そして保育園と外国人保護者を「つなげる」フェーズの二つに分けて報告する。次に、これらの活動期をアクターとの対話の軌跡として俯瞰する。最後に、定期的にメンバーが実施した振り返りから、個々のメンバーが抱く「申し訳なさ」や「もやもや」といった意識が「ありがたさ」や「手ごたえ」へと変容した過程、また教員に生じた変容について報告する[4]。

キーワード：　保育のことば、外国人家族、かかわり合い、対話、変容

Abstract

This paper reports on the “Connecting Foreign Residents with the Local Community: Welcome to Japanese Nursery and Daycare Centers” Project, which was implemented as a University of Tsukuba Social Contribution Project in FY2021. The project aims to identify the communication problems that foreign parents experience in Japanese childcare settings and the challenges raised in addressing them, and to work with the local community to resolve these issues. The paper reports on the activities of the 10-month project, dividing it into the two phases of *tsunagaru* (linking) and *tsunageru* (connecting), and discusses the findings of the project members in terms of the trajectory of their reinterpretations of the project which they formed over these phases. We will also report on the “transformations” that occurred in the individual project members as well as the project representative based on the encounters and dialogues that took place throughout the project’s activities.

[1] 筑波大学人文社会系　准教授。 メール：ide.risako.gm@u.tsukuba.ac.jp
[2] 筑波大学人文社会ビジネス科学学術院　博士後期課程。メール：s202030018@japan.tsukuba.ac.jp
[3] 筑波大学社会・国際学群国際総合学類　学士課程。メール：メール：s1910341@s.tsukuba.ac.jp
[4] 本稿は筑波大学令和 3 年度社会貢献プロジェクト（タイプ B）の支援を受けたものです。本調査にご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。また本稿の改稿に際し、査読者の方々から非常に建設的なコメントを頂戴しました。ここに記して感謝いたします。
© 2023 筑波大学大学院人文社会ビジネス科学学術院人文社会科学研究群国際日本研究学位プログラム紀要『国際日本研究』

Keywords: Communication in preschools, Foreign residents, Dialogue, Transformation

１．はじめに

本稿は、家族を帯同して日本に滞在する外国人家族について、保育の場での保育者とのコミュニケーションと相互理解を促進する、かかわり合いのしかけづくりを目指すプロジェクトの実践報告である。

従来、日本の小中学校における外国人児童や生徒に対する日本語支援は、自治体や学校のボランティアが主体となって実践されてきた。これに対し保育園、幼稚園、こども園（以下、保育園）における外国人保護者への日本語支援は充実しておらず、こうした場での異文化間コミュニケーション研究も限定的である（加賀美ほか 2016, 22）。また大規模アンケート調査（杉本・樋口 2019）からは、外国人保護者との対面や書き言葉でのコミュニケーションにおいて、保育者が様々な困難を感じていることが明らかにされている一方で、外国人保護者側の抱える困難に関する研究はそれほど進んでいない。こうしたことから、多様な文化的規範意識が共有される保育の場での実態調査は急務であり、地域社会で外国人家族の子育てを包括的に支える必要性が論じられている（額賀 2019）。

本稿で紹介するプロジェクトは、茨城県の中でも外国人人口の多いつくば市を事例とし[5]、保育園での保育士（保育の場の事務員などのスタッフを含む）と外国人家族のコミュニケーションを促進するしかけづくりを試みるものである。本プロジェクトの背景と目的は以下の通りである。

１．１ プロジェクトの背景と目的

本研究は日本の保育園に子供を通わせる際に、日本語に堪能でない外国人保護者が遭遇する困難について、筆者井出の個人的な問題意識をもとに開始されたものである。本プロジェクトに先立ち行われた 2019 年のつくば市内の保育園でのフィールド調査、および筑波大学の家族を帯同する留学生へのインタビュー調査（井出・井濃内　2020、井濃内・井出 2020）からは、次の 4 つの問題点が明らかになっている。（1）家族を帯同する留学生の中には子供を地域の保育園に入れる経験を通じて、はじめて日本語を学ぶ必要性を実感する人が少なくない。一方、勉学や就労等により日本語を学ぶ機会が限られていること（井出・井濃内　2020）。（2）保育園において、外国人保護者と日本人保育者の間に「日本語が必要だができない」「英語で伝えなくてはいけないが、それができない」といった「ことばの壁」が強く意識されていること。（3）日本人には暗黙知である保育園の文化的規範や習慣が、外国人保護者には理解されにくいこと。（4）上記（2）と（3）から、保育士と外国人保護者の間に、相互理解に対する「誤解」と「諦め」とが生じていることである（井濃内・井出 2020）。

上記を背景に、本研究は 2021 年度筑波大学社会貢献プロジェクト事業の支援を得て、「つなげる外国人家族と地域社会—日本の保育園へようこそ」プロジェクトとして始動した。プロジェクトの目的は地域社会と連携・連動しながら、保育の場で保育士と外国人保護者が体験するコミュニケーション上の問題を特定し、それらを解決するコミュニケーション上のしかけをつくることにある。その方法として、本プロジェクトは様々なアクター

[5] 2022 年 5 月現在人口比約 4.2% （茨城県つくば市 HP https://www.city.tsukuba.lg.jp/shisei/joho/jinkohyo/1017507.html、最終閲覧 2022.10.07）

と協働しながら課題解決を探究する「参加型アクションリサーチ（Participatory Action Research）」の方法を援用する。尚、本プロジェクトが模索するコミュニケーションのしかけとは、日本語や英語といった言語の修得ではなく、保育の場において保育士と外国人保護者とが互いに声をかけ合い、対話する「かかわり合い」のきっかけを保育の場に生むことを目的とする。

本稿は、2019 年から 2020 年にかけての本研究の第二期ともいえる、2021 年 5 月から 2022 年 3 月までの 10 か月の活動実践報告である。プロジェクトの活動母体は、筆者井出を代表に、井出が運営するゼミの有志 9 名（国際日本研究／国際公共政策学位プログラムの大学院生 5 名および国際総合学類 3、4 年次 4 名）から成るグループである。本稿ではまずプロジェクトの活動内容を、プロジェクトメンバーが地域社会とつながる「つながるフェーズ」、及び保育士と外国人家族とをつなげる「つなげるフェーズ」の二つに分けて報告をする。次に、プロジェクトの軌跡をインゴルドのメッシュワークの概念を援用して論じるとともに、実践過程においてプロジェクトメンバーと教員の中に生じた気付きを紐解き、そこに生まれた対話と変容について報告をする。

２．活動報告Ⅰ【つながるフェーズ】

プロジェクトの前半（2021 年 5 月～12 月）は「つながるフェーズ」として、プロジェクトメンバーが①地域社会において同じ問題意識を持つ人や組織とつながる、②日本の保育園に子供を通わせた経験をもつ外国人保護者とつながることを目的に活動を行った（表 1 参照）。プロジェクトに参加するメンバーは各自、在日外国人、ジェンダー意識の形成、移民社会、公共人類学などをテーマにした学生である一方、その多くが子育て未経験者であったことから、現場の声を聞く必要性があった。

当時、コロナ禍の影響で保育園への立ち入りが制限されていたことから[6]、①では問題意識を共有すると想定される自治体、組織や個人にお話を伺った。具体的には、常総市を拠点に外国人支援を長く実施されてきた茨城 NPO センター・コモンズ代表の横田能洋氏へのヒアリング、つくば市政策イノベーション部・国際都市推進課・市民活動課国際交流室・こども部幼児保育課とのヒアリング、筑波大学学生交流課留学生支援の隅田詩織氏への講演依頼、つくば市国際交流協会の中村貴之氏へのヒアリングである。

特につくば市役所と国際交流協会訪問では、外国人家族と地域社会をつなげる活動に関して、行政側が「取り組むべき課題」と認識している一方で、保育園や幼稚園までは手が回っていない現状が明らかとなった。また隅田氏の講演では、筑波大学内の家族を帯同する留学生の抱える数々の悩みが、具体的な経験談とともに明かされた。①における活動は、異なるアクターが同じような問題意識を抱えていることを共有する機会であり、また長く活動をされてきた方々の実践について学ぶ機会であった。また同じ問題意識についての行政側や当事者の外国人保護者の視点を共有する経験ともなった。

5 月	19 日・Zoom	初回ミーティング
	31 日・対面	コアメンバーKick-off MTG、メンバー募集開始

[6] コロナ禍以前、保護者は送迎の際各保育室まで入ることができたが、コロナ後には多くの保育園で保護者や部外者の立ち入りを制限し、送迎は昇降口で園児の受け渡しがされている。

6 月	18 日・対面	Kick-off MTG、グループワーク（参加動機の共有）
	25 日・対面	茨城 NPO コモンズ代表 横田氏 訪問
7 月	2 日・対面/Zoom	論文購読、T-ACT 化するかの検討
	12 日・対面	つくば市役所ヒアリング
	16 日・対面	ヒアリング報告会、調査チーム決定
	30 日・対面	筑波大学留学生担当課 隅田氏 講演
8 月	20 日・対面/Zoom	入園手続き調査、つくば市内保育園現状調査の報告
	25 日・対面	つくば市国際交流協会 中村氏 面談
9 月	6 日・対面	外国人保護者（協力者）へのインタビュー初歩計画
	15 日・対面	インタビュー項目の検討等
	24 日・Zoom	パイロットインタビュー、振り返りと目的の修正
10 月	8 日・Zoom	協力者への連絡、質問項目の再検討
	9 日・Zoom	外国人保護者へのインタビュー①
	22 日・対面	インタビュー実施報告
11 月	12 日・対面	ここまでの体験の振り返りとキーワードの洗い出し
	19~24 日・Zoom	外国人保護者へのインタビュー②
	26 日・対面	インタビュー実施報告、データの文字化
12 月	19 日・メール	協力者にお礼としての greeting card 送付

表 1：つながるフェーズの活動内容

②については、つくば市在住の外国人保護者に日本の保育園での経験を伺うことで、プロジェクトメンバーが当事者とつながることを目指した。市内の保育園・幼稚園に子供を通わせている（または通わせたことがある）外国人保護者 6 名に対し、インタビューを実施した。協力者はプロジェクト代表者の友人からの雪だるま方式で募り、主意を説明し、同意書を得た上で、半構造化インタビューを実施した。インタビューはオンライン会議ツール Zoom を使って実施し、大学院生と学類生がペアで入り、一人が英語で質問をし、もう一人がメモを取った。1 件あたりの時間は平均 40 分である。[7]

２．１ 外国人保護者へのインタビュー

日本の保育園や幼稚園での経験を語っていただくにあたり、3 種類（行事・もちもの・おたより）の資料を画面上で共有し、具体的な経験談や意見を伺った（図 1）。まず「水筒」「連絡帳」「おむつ」などの保育園の持ち物について「日本語での名称を知っているか」を尋ねた。次に「運動会」「避難訓練」「芋ほり」といった保育園でのイベントについてどのように理解をしているかを問い、エピソードを語ってもらうきっかけとした。最後に保育園での「おたより」について、提示した形式の文書を見たことがあるか、その便利さや不便さについて自由にお話しいただいた。

[7] 今回インタビューをさせていただいた外国人保護者の方々は、本プロジェクトの調査協力者であると同時に共同実践者、アドバイザーとして位置づけている。

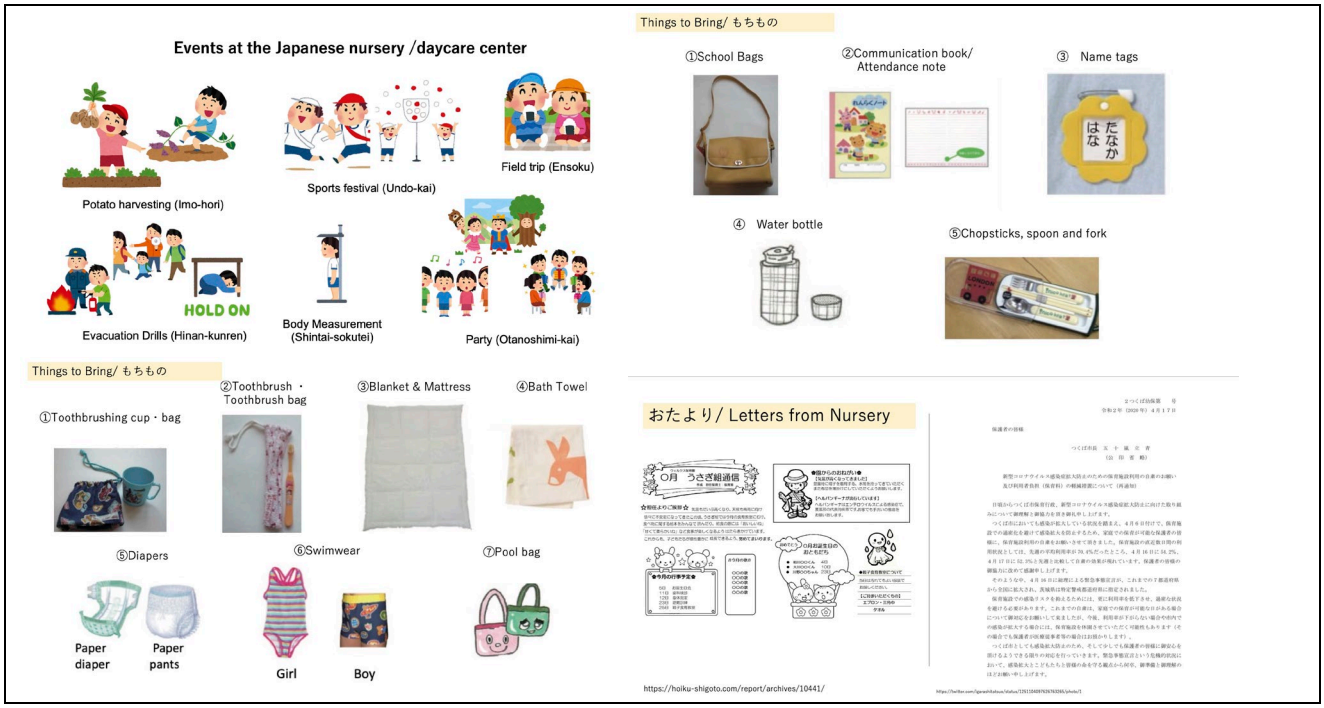

図 1：インタビューで使用した資料
（左上：行事、右上・左下：もちもの、右下：おたより）

上記のインタビュー内容は、直後のプロジェクトミーティングでブリーフィングをし、インタビューを通してメンバーが感じた気持ちも共有された。6 名のインタビュー協力者の語りからは、（1）日本社会・保育園文化における暗黙知の存在、（2）日本語を勉強する時間がないことへの不満と不安、（3）保育士との言語・コミュニケーションの壁、という 3 つの悩みが引き出され、先行研究やヒアリングでの諸問題が再確認される形となった。またプロジェクトメンバーにとって、当事者個々人の経験をオンラインで直接伺う経験は、個人の痛みや悲しみといった情感に触れる機会ともなった。たとえばある協力者は、資料（図 1 左上）にある「Potato harvesting（*imo-hori*）」のイラストを見て、“Potato harvest made me cry”と語り始めた。芋掘りの際の持ち物がわからず、長靴と軍手を持たせずに子供を登園させ、子供が畑に入れてもらえなかった経験である。後日子供からそのことを聞き、子供への申し訳なさから泣いてしまったという経験を振り返り、この協力者は「‘Bring hand gloves’, ‘Bring towel’と書くだけでいい。ただ英語を小さな括弧に入れて書いてくれるだけでいい」（筆者らによる英語からの日本語訳）と希望を述べている。

また別の協力者は、おたより文書について、「大事そうなことが書かれているように見える」（‘looks informative’）のにわからないのでフラストレーションを感じること、また友人に翻訳を手伝ってもらうことを常に申し訳なく、負担に感じていることを明かした。このように、つながるフェーズ②の経験からは、先行研究で論じられてきた外国人家族の子育てにおけるニーズ（額賀 2019; 杉本・樋口 2019）が確認されたことに加え、当事者個々人の抱える悩みや保育士への感謝の気持ちなどをメンバーが直接感じる機会となった。

３． 活動報告Ⅱ 【つなげるフェーズ】

「つながるフェーズ」に続く「つなげるフェーズ」（2022 年 1 月から 3 月）では、①保育士と外国人家族をつなげるコミュニケーションのしかけをつくる、②振り返りの活動を通してプロジェクトとプロジェクトメンバーの思いと学びとをつなげる、の 2 つを目的に活動を行った（表 2 参照）。①では、保育士と外国人保護者間の対話を促すポスターの試

作品を作成し、つながるフェーズのインタビュー協力者からフィードバックをもらい改良を重ねた。②では、プロジェクトメンバー同士で語り合いの場を設け、プロジェクトをメタ的に俯瞰するキーワードを炙り出した。

1 月	21 日・対面	ポスター内容の検討、実物作成
2 月	4 日・Zoom	ポスターの作成、振り返りシートの作成
	18 日・Zoom	ポスター・発表スライドの修正、活動の振り返り
	25 日・Zoom	ポスター・発表スライドの修正、インタビュー協力者にポスターのフィードバックを依頼、プロジェクトをめぐるディスカッション
3 月	9 日・Zoom	プロジェクト HP 作成
	10 日・対面	筑波大学シンポジウムのパネルセッションでの実践報告

表２：つなげるフェーズの活動内容

３．１ ポスター作成

つなげるフェーズで試作したポスター（図 2）は、保育の場でコミュニケーションを諦めてしまう保育士と外国人保護者の間をつなぎ、外国人保護者が言語・文化的に排除される気持ちを緩和することを目的とする。保育の現場（昇降口や保育室入り口など）に貼り、指差しや簡単な日本語や英語で、持ち物を確認したりすることを可能とすることを想定した。また外国人保護者や保育士が日本語や英語といった語学を勉強する学習教材ではなく、日本人の保護者や子供にも有用な楽しく使えるデザインを目指した。試作品（図 2 左上）では、上部に保育園で使用する持ち物、下部には保育現場で頻繁に使われる表現を掲載し、英語・中国語・スペイン語訳とともに掲載した[8]。

試作品はつながるフェーズのインタビューで知り合った外国人保護者（以後、協力者）にメールで送付し、どのような言葉・表現が必要・不要か、他に必要な情報があるか等のフィードバックをメールでいただいた。試作品では日本語表現の後に、多言語訳を記載していたが、母語が最初に来ると見やすいという意見から、その順番を入れ替えた。「登園時に家庭での子供の様子を先生に伝えるためのフレーズ集がほしい」という意見からは、持ち物リストから表現リストを独立させ、子供の体調を表す語彙や簡単なやりとりのための表現を掲載した（図 2 左下）。また“Potato harvest made me cry”の経験談からは、芋掘りを事例とした保育園の年中行事に特化したポスターを作成した（図 2 右下）。ここではイベント時に必要な持ち物をイラストで説明し、保育士が補足事項を記す空欄を設けた。ポスターはくり返し使用ができるようにラミネート加工をし、ポケットに入れられる簡易版も作成した。尚、2022 年 3 月に本プロジェクトの HP を作成し、ポスターに掲載した QR コードから、プロジェクトの問い合わせフォームにつながるようにした[9]。

[8] この 3 言語はプロジェクトメンバーにそれぞれの語学に堪能なものがいたことから選ばれたが、今後地域や各保育の場で必要とされている言語に合わせて作成する予定である。

[9] ポスターは 2022 年 10 月現在も改良を重ね、つくば市役所のポータルサイトにフリーウェアとして掲載予定である。また今後、かかわりあいのしかけをポスターだけでなく、ぬり絵やカルタ、すごろくの形にする案も出ている。

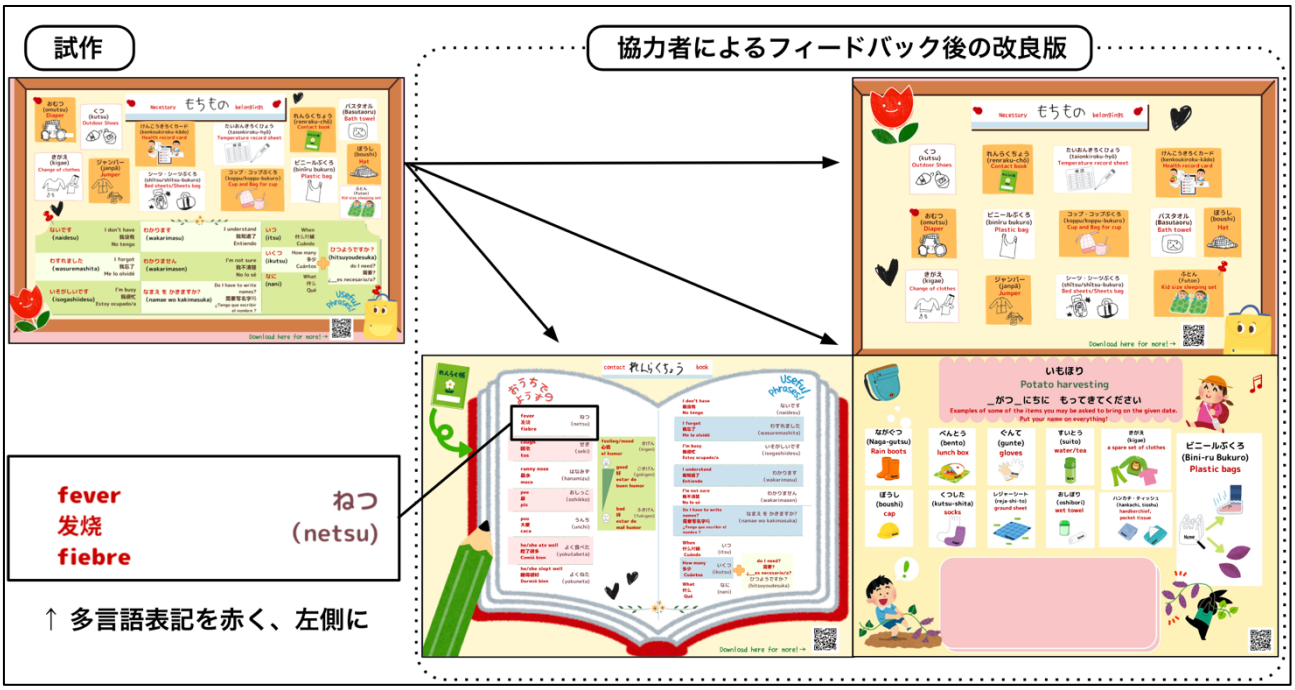

図２：ポスター試作品から改良版まで
（左上：試作品、右上：改良版「もちもの」、
中央下「れんらくちょう」、右下「イベント（いもほり）」）

３．２ シンポジウムへの登壇

10 か月に渡る活動の集大成は、2022 年 3 月に筑波大学で開催されたシンポジウム『多文化共生社会の持続可能な学びの場のデザインを目指して』におけるプレセッション「プロジェクト型教育がひらく大学の学びと未来」での登壇であった。ここでは本プロジェクトの 2021 年 5 月から 2 月までの活動報告とともに、プロジェクトを通した学生の気付きと変容について、大学院生１名と学類生２名が登壇し、報告を行った（荒井ほか 2022）。シンポジウムにはオンサイトとオンラインで 200 名を超える参加者があり、他のプロジェクトに関わる方々や参加者との交流を深めることで、新たな「つながり」が生まれた。またシンポジウムではオンラインプラットフォーム Slido を用いていたことから、発表者と聴衆双方向でコメントや質問を介した対話がくり広げられた。この経験も含めたプロジェクト活動を通した気付きと変容について、次に報告する。

４．活動を通した対話とチームの変容

本節では本稿の２つ目の目的として、定期的にプロジェクトメンバーが実施した振り返りから、プロジェクトチームとしての学びと意識の変容について報告する。それに先立ち、以下にプロジェクト全体の軌跡を俯瞰したい。

４．１ 対話から織りなされるメッシュワーク

本プロジェクトの「つながるフェーズ」では、つくば市役所をはじめとする各機関との対話を通じて、互いに思いを開き、似通った目的意識を持つ人々とのつながりを得た。また外国人保護者とのインタビューでは、個々人の経験を共有し、これらの方々にポスター作成の際、助言をいただいた。これら「つながるフェーズ」の活動は、当事者間のニーズを探り、共有する期間であった（湖中・ディハーン 2021）。つまり人々と出会い、それぞれの声（ニーズ）を聞くことで、プロジェクトの足場が広がり、目的意識が共有、強化

される期間である[10]。続く「つなげるフェーズ」は、得られたニーズをポスターという小さなプロダクトへと還元する試みであった。その過程で、プロジェクトのアクターはプロジェクトメンバーだけでなく、つくば市や外国人保護者自身へと拡張した。また作成したポスター自体も、プロジェクトを保育の現場へとつなげるアクターとなりつつある。

このプロジェクトの軌跡は、文化人類学者のティム・インゴルド（2014）が提唱する「メッシュワーク」として捉えられる。インゴルドのメッシュワークは、生きている状態を動詞的世界として捉え、伸び続ける先端をもつ糸同士が相互に影響を与え伸び続ける様を、織り合わされた踏み跡として社会学的、生態学的に描く（インゴルド 2014、2018[2015], 19）。この概念を援用し、本プロジェクトの軌跡を図示したものが図 3 である。社会学で用いられる社会的ネットワーク理論（social network theory）が、固定化された点と点をつなぐ「線」であるのに対し、メッシュワークとしてのプロジェクトの軌跡は、曲線と曲線とが織りなすように彷徨い、絡まり、つながる「糸」としての様子を表す。保育園でのフィールドワークにはじまった糸の絡まりは、つくば市役所やインタビュー協力者との対話へと広がり、当初予定していなかった保育園とのつながりも生んだ。小西（2021）が指摘するように、フィールドの面白さや重要性は「予定調和的でないことであり」、多様な他者との関係により成立し、また「何が起こるかわからない偶発性を」含む、「世界や他者との対話」である（小西　2021, 68）。これと同様に本プロジェクトも、個人あるいはプロジェクトチームだけがアクターとなって進めてきたものではなく、様々な出会いと対話の積み重ねの中で、偶発性をもって伸び（進み）つづけた。また巻き込み、巻き込まれる過程のくり返しが、新たな出会いを生み、つながりが拡大する過程を辿った。

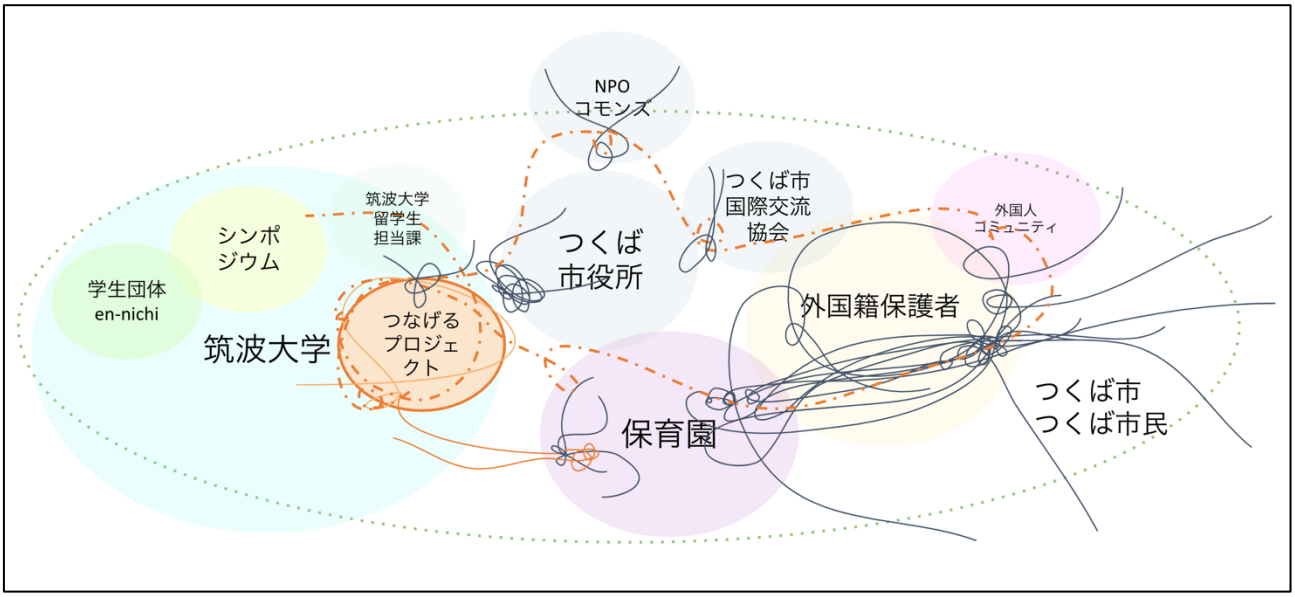

図 3：メッシュワークで描くプロジェクトの軌跡

４．２ プロジェクトの気付きと変容ーメンバーの振り返りから

次に、プロジェクト活動期間に定期的に行われた振り返りの作業から、プロジェクト実践に伴い生じたメンバーの学びと変容について記述的に報告する。ここでは 2021 年 5 月のプロジェクト開始時期、「つながる／つなげるフェーズ」実践期の 11 月と 2022 年 2 月、そして 3 月のシンポジウム登壇直後の 3 期の振り返りからその変容をまとめる。

[10] 尚、2021 年 7 月にヒアリングを実施したつくば市役所には、1 年後の 2022 年 7 月に活動成果の報告会を実施している。

プロジェクトが開始した当初、チームメンバーは、「コロナ禍でインターンや留学のチャンスがないから」「インタビューを経験してみたいから」「卒論研究に役立つかもしれないから」といった様々な理由でプロジェクトに参加していた（2021 年 6 月の参加動機共有から）。一方で、ミーティング内でのメンバーはあまり発言もせず、互いの様子を伺う状態だった。しかしミーティングを重ねるごとに、徐々に自発的な行動や発言が増えるに至った。そのきっかけとなったのが定期的な振り返りによる意識の共有であった。小グループに分かれて互いに今の気持ちを分かち合う振り返りでは、特につながるフェーズのプロジェクト活動に際し、メンバーが「申し訳なさ」や「モヤモヤ」を感じていたことが明らかになった（2021 年 11 月のミーティングより）。ここでいう「申し訳なさ」や「モヤモヤ」とは、自分達が行う活動がすぐに外国人保護者の役に立てていないという思いや、今後この活動が保護者へのサポートになるのか、自分がチームに貢献できているのかという疑問や不安であった。この不安には、教員がプロジェクトをやるからにはすぐに「結果を出さないといけない」という観念に囚われていたことも関係する。しかしつくば市役所とのヒアリングの際、「このプロジェクトは長いスパンで時間をかけてやって行った方がいいと思います」という言葉をいただいた（2021 年 7 月のヒアリング）。この声を生かし、一つ一つの出会いをその場限りにするのではなく、greeting card のやり取りをするなど、得られたご縁を育てること、つまりプロジェクトのゴール地点ではなく、過程に力点を置く方向に意識が変容した。

一方、2022 年 2 月に行った振り返りでは、「つながる／つなげる」フェーズの活動を通したメンバー各自の「プロジェクトに参加する意味」と「参加を通して感じたこと」を小グループで共有し、その後全体で模造紙にキーワードを書き出した。その過程から、「じっくり」「つながり」「ひらいていく」の 3 つのキーフレーズが炙り出された。

（1）「じっくり」：プロジェクトを進める中で、社会的な課題解決は思うより時間がかかることへの気付きがあった。できることを模索し、焦ることなく、一歩一歩を確実に進めることの重要性への気付きである。

（2）「つながり」：対話を通して同じ志を持つアクター間でつながることが、課題解決への土台を生み出すことへの気付きである。また、直接対話の機会をもつことで、抽象的概念であった「地域社会」や「組織・自治体」への認識が、名前をもつ「人」の顔や声へと変容した。

（3）「ひらいていく」：つながりとしての対話は自身の思いや考えを他者へとひらき、開示することから始まる。自分を開示する上での恐れを乗り越え、自分を開く勇気が必要であることへの気付きである。

このように、各アクターとのヒアリングだけでなく、メンバー同士が振り返りを通して互いに思いや気持ちをひらいていくことは、安心して活動を実践する基盤の構築ともなり、「申し訳ない」や「モヤモヤ」した意識をどこかで抱えつつも、具体的に実践するきっかけとなっていった。

そして、2021 年 3 月のシンポジウム直後に行った振り返りからは、次の変容が明らかになった。まず、各メンバーがプロジェクト開始時よりも何かしらの「成長」や「手ごたえ」を感じたことである。シンポジウム当日の Slido のコメントからは、活動についての

励ましや、作成中のポスターについて「すぐ使いたい」という自治体の声も寄せられた。メンバーの振り返りからは「充実感」や「前向きな気持ち」、「達成感」や「やり切った」という思い、また「大学の学びって何だろうと考えるきっかけになった」という思いが共有された。また「少しでも成長した」「意識が変わった」と実感し、頑張ろうという前向きな気持ち、さらに責任が生じたとの感想もあった。さらにシンポジウムに登壇できた経験も含め、これまでのさまざまな人々や組織とのかかわりについて、各メンバーが「感謝の気持ち」を感じる機会となった。

４．３ プロジェクトの気付きと変容－教員の振り返りから

最後に、このプロジェクトを通しての、プロジェクト代表者である教員の気付きと変容について振り返る。

「つなげるフェーズ」の活動期において、教員は本活動を課題解決型学習（Project/Problem Based Learning; PBL）と位置付けていた。しかし、活動が進むにつれ、「結果」としての課題解決よりも、地域のアクターと連携する地域連携型学習（Community Based Learning; CBL）としてプロジェクトの「過程」を重視する捉え直しがおきた。また、メンバーの振り返りと共有を意識的に実施してきたことで、本プロジェクトが自己変容型フィールド学習（Self-transformation-oriented Field Learning: SFL）、さらにはプロジェクトに駆動される協働の学び（Project Driven Learning; PDL）であるという意識が生じた（湖中・ディハーン 2021）。この変容には、教員自身がさまざまなアクターと交わした対話が関与している。たとえば 2021 年 7 月につくば市を訪問した際には、1 時間のヒアリングのために、三つの部署および関連自治体から計 11 名の方々が参加してくださった。その時の対話や、ヒアリング終了後も廊下で交わされたやりとりは新鮮な驚きや喜びであり、アクター同士が互いに巻き込み巻き込まれ、協働でプロジェクトが進むとの実感を得た。また、アクターごとに役割があり、大学や大学生であるからこそできることがあるという認識を得た。

また代表者はプロジェクト考案当初、日本の保育園文化について多言語で説明をするビデオガイドの作成を念頭に置いていた。しかしさまざまなアクターやプロジェクトメンバーと対話を重ねるにつれ、外国人保護者を対象とした情報提供をするのではなく、保育士と保護者をつなぐことばを、人々の「間」におくことに意味があると考えが変容した。作成中のポスター等は 2022 年 10 月現在、保育の現場で使用してもらい、保育士、外国人・日本人保護者からのフィードバックを得ながら、改良を重ねている。

５．「つづける」：2022 年度以降の活動に向けて

本稿では、2021 年度に実施した社会貢献プロジェクトの実践報告を行った。本プロジェクトでは課題解決を目標としながら、第一段階として地域社会と自らが「つながる」こと、第二段階として保育士と外国人保護者を「つなげる」ことを目指して活動した。その過程において、焦ることなく「じっくり」と「つながり」、「ひらいていく」過程が主体性の模索や変遷のプロセスに繋がったといえる。

文化人類学者であり、大学生が行う地域志向教育、PBL 教育の可能性を探索する早川は、課題解決型やプロジェクト型の教育について、「制御できず予測不可能な環境に身を置くなかで、外在的に与えられてきた世界をわかりなおすことができる」とする（早川 2020, 190）。本プロジェクトもまた、動きつづける人々と出会い、再帰的に自らの立場を問い直し、目の前の現実をその都度捉えようとする中で、世界をわかりなおしてきた。偶発的

なメッシュワークとしての活動を「つづける」ことで、今後も他者と対話し、呼応し合い、共に変容することを目指したい。また地域連携型、自己変容型プロジェクトが、大学の学びにおいてどのように価値をもつのかについても今後検討していきたい。

参考文献

荒井愛理・狩野裕子・アシュレシャ　マラテ・ヨーン・ペーン・木暮芽衣・大塚葉月・井出里咲子（2022）「「つなげる外国人家族と地域社会—日本の保育園へようこそ」プロジェクト」筑波大学人文社会系主催シンポジウム『多文化共生社会の持続可能な学びの場のデザインを目指して』プレセッション「プロジェクト型教育がひらく大学の学びと未来」筑波大学（ウェビナー配信併用）口頭発表

井出里咲子・井濃内歩（2020）「家族をもつ留学生の言語選択とコミュニケーション問題—つくば市でのフィールドワークから」第 3 回国際シンポジウム「地域社会と多文化共生シンポジウム」筑波大学　口頭発表

井濃内歩・井出里咲子（2020）「保育園と外国人保護者のコミュニケーション:ことばを問い,フィールドとかかわる言語人類学的実践研究」『言語文化教研究』18: 61-81.

インゴルド ティム（2014 [2007]）『ラインズ: 線の文化史』（工藤晋訳）左右社（Ingold, T. 2007. “Lines: A Brief History.” London: Routledge.）

————（2018 [2015]）『ライフ・オブ・ラインズ—線の生態人類学』（筧菜奈子・島村幸忠・宇佐美達朗訳）フィルムアート社（Ingold, T. 2015. “The Life of Lines.” London: Routledge.）

加賀美常美代・徳井厚子・松尾知明編著（2016）『異文化接触における場としてのダイナミズム（異文化間教育学大系　第 2 巻）』明石書店

湖中真哉・ディハーン、ジョナサン（2021）「フィールドワークと教育を超える協働実践：グローバルな当事者間のニーズ共有接近法の実験から」箕曲在弘・二文字屋脩・小西公大（編）『人類学者たちのフィールド教育－自己変容に向けた学びのデザイン』第 7 章、ナカニシヤ出版、pp.139-155.

小西公大（2021）「偶発性を生み出すフィールド教育：学びが生れる余白と異種混交性」箕曲在弘・二文字屋脩・小西公大（編）『人類学者たちのフィールド教育－自己変容に向けた学びのデザイン』第 7 章、ナカニシヤ出版、pp.67-87.

杉本香・樋口尊子（2019）「保育者から見た外国人保護者とのコミュニケーションにおける問題と日本語教育支援の可能性：東大阪市でのアンケート調査の結果から」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』9: 1-11.

早川公（2020）「地域志向教育における＜主体性＞の布置—中動態を手掛かりとして—」『関係性の教育学』Vol.19（1）: 183-192.

額賀美紗子（2019）「外国人家族の《見えない》子育てニーズと資源仲介組織の役割—外国人散在地域におけるフィールド調査からの政策提言—」『異文化間教育』49: 44-60.